

介護福祉士養成校における初年次教育の取り組み —地域高齢者との交流事業を通してのまなびを考える—

三上 ゆみ*・伊藤 博康・松本 百合美・池田 明子・松永 美輝恵

新見公立短期大学地域福祉学科

(2013年11月13日受理)

本学の介護福祉士養成学科における新入生を対象に高校からの円滑な移行を図り学習及び人格的な成長の実現に向けての事を目指した初年次教育の基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ開講した結果を振り返り、介護人材養成への効果と教育課題を明らかにすることを目的に研究を行った。

科目の実践演習である交流事業の際、学生と地域高齢者双方にアンケートを行った。結果、学生は受け身の交流会より学生自身が企画を行うほうが「喜ばれた」「役に立つ」といった満足度が高く自分の学びになったと感じており、交流を行うことで、世代の異なる高齢者とのコミュニケーションの技法を学ぶことができた。また高齢者にとっては社交の場の提供となり、異なった世代間の交流の場となっているだけでなく、指導的な立場で学生を育てようとしていることが明らかになった。これら交流を通して地域の高齢者に喜んでもらう姿をみて、学生が自己の満足感や自己肯定感を得ることは学習の喜びにつながり、大学生活への円滑な移行に役立つと考えられる。

(キーワード) 大学教育, 介護福祉士, 初年次教育, 地域交流

はじめに

我国の18歳人口は昭和41年をピークに248万人から現在は119万人となり¹⁾、減少が止まらない一方、大学への進学率は51%と高くなり入学定員超過率は減少している。また短期大学の進学率は5.4%にとどまり、入学定員超過率は0.89倍と学生確保は大きな課題で、その学力の確保や生活への円滑な移行が問題となっている。なかでも、介護福祉士養成においては平成19年の社会福祉士および介護福祉士法の改定に先立ち求められる介護福祉士像として²⁾、厚生労働省は介護ニーズに対応し、介護サービスにおける中心的な役割を担える人材として「利用者・家族・チームに対するコミュニケーション能力」を求めている。これらをうけ本学の地域福祉学科では初年次教育を開講したので、その1年間の振り返りを行い学生の学習効果と課題の分析を行うことは今後の教育方法への示唆を得ることを研究の目的とした。

1. 研究方法

- 1) 調査期間：平成24年6月～2月
- 2) 調査対象：本科1年生48名、市内高齢者22名
- 3) 調査方法：「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」(以下、基礎ゼミと表す)に、学内講義と演習を設定し、コミュニケーション力の向上や企画、実践体験の場の実践として地

域の高齢者との交流事業をグループに分かれ延年6回実践した。体験交流ごとの満足度について質問紙によるアンケート調査を実施し本研究の分析対象とした。アンケート内容は学生8項目、地域高齢者7項目の交流会に参加しての満足度を「全くそう思わない」1点、「あまり思わない」2点、「どちらとも思わない」3点、「まあまあそう思う」4点、「たいへんそう思う」5点の5段階の間隔尺度を用いて、交流会ごとに記入を求め、また項目ごとに自由記述を求めた。

4) 授業の概要

平成24年入学生、48人を対象に基礎ゼミⅠ・15コマ(30時間)の前期開講と、基礎ゼミⅡ・8コマ(16時間)後期の開講とした(表1)。授業の目的を基礎ゼミⅠでは、大学での生活に慣れ、大学での学び方を学ぶ。あらゆることを調べ、観察し観察したことをまとめ発表する力(学習技術の習得)を養い、基礎学力とコミュニケーション力を高めることとした。そのため、①講義ノートを取る力(聴く、読む、書く)、②調べる力(図書、インターネットから情報収集をする)、③まとめる力(レポートの書き方)、④発表する力(レジュメを書く、パワーポイントの作成、プレゼンテーション)、⑤コミュニケーションする力(グループメンバーとの交流、地域高齢者との交流)等を講義と演習で体験学習を行うこととした。さらに基礎ゼミⅡでは、学習技術を基礎としてまとめる力をさらに

*連絡先：三上ゆみ 新見公立短期大学地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

表 1 平成24年度前期基礎ゼミナール時間割 (2単位)

	項目
基礎ゼミ I (1単位)	第1回 オリエンテーション・大学で学ぶということ(講義)
	第2回 図書・文献検索方法、インターネット検索方法(講義・演習)
	第2回 グループメンバーとの交流(演習)
	第4回 講義ノートの取り方(講義)
	第5回 コミュニケーションの取り方(講義)
	第6回 高齢者との交流準備
	第7.8回 地域高齢者との交流(演習)
	第9.10・11回 レポート・レジュメの書き方 (講義・演習)
	第12.13回 パワーポイントの作成の仕方、発表の仕方(講義)
	第14回 地域高齢者との交流まとめ
	第15回 実践発表①(演習)
基礎ゼミ II (1単位)	第16.17回 レクリエーションプログラムの作成(演習)
	第18.19回 レクリエーションプログラムを用いての交流(演習)
	第20.21回 実践のまとめ
	第23.24回 実践発表②

深め、コミュニケーション力・表現力を高めることを目的とした。

実際には、前期で学んだコミュニケーション力と発表技術をもとに、介護予防やレクリエーションプログラム作成し、実際に地域高齢者に対してプログラムを実施した。その後その結果を評価し表現力を高めるために学内での発表をグループごとに発表を行った。

5) 地域住民交流会

基礎ゼミ I では、第1, 2 回目の対象学生を2グループに分け前半 A グループと後半 B グループに分けて参加を行った。第1 回目は草餅、柏餅といった昔からのお菓子づくりを通して、交流を行った。2 回目の B グループは竹を使った水鉄砲づくりをそれぞれ高齢者グループより講師を出してもらい、指導を受けながらの交流を実践した。基礎ゼミ II では学生が、4 グループに分かれそれぞれの交流会で高齢者に対して企画と実践を行う場とした。

6) 倫理的配慮

調査対象者には研究の目的・方法を口頭で説明を行い、調査への協力は、調査に記入しなくても不利益は生じな

表2 平成24 年度 基礎ゼミ I・II 年間交流会実施内容

10:00~11:30 (準備片づけ 9:30~12:00)	
第1回 5/31 (木)	昔お菓子作り (草餅、柏餅) Aグループ 学生 8~9 人グループ×3=25 人
第2回 7/5 (木)	昔遊び道具作り (竹水鉄砲) Bグループ 学生 6~7 人グループ×4=25 人
第3回 10/1 (木)	サロン学生企画 『転倒予防教室』 学生 13 名
第4回 11/3 (土)	高尾文化祭への参加 『認知症予防講座』 学生 13 名
第5回 12/6 (木)	サロン学生企画 『いろいろ年賀状づくり』 学生 12 名
第6回 1/16 (水)	サロン学生企画 『書初めしりとり』 学生 12 名

いこと、データは統計的に処理され個人が特定させることはないようにプライバシーには十分配慮することを、回答を持って同意を得たと取り扱った。

2. 結果

1) 地域住民交流会の参加者

学生男女比は、1:9 割で女子学生が多くを占め、延べ参加者 96 人参加の内 86 人の回答があった。地域高齢者は1 回あたり 8 人~15 人の参加がみられ、延べ参加者 75 人の内、アンケートの回答があった 65 名の回答を分析対象とした。参加者の平均年齢は 75.86 ± 5.75 歳で 61 歳から 86 歳までであった (図 1)。男女比は男性が 78%で、女性 22%であった。

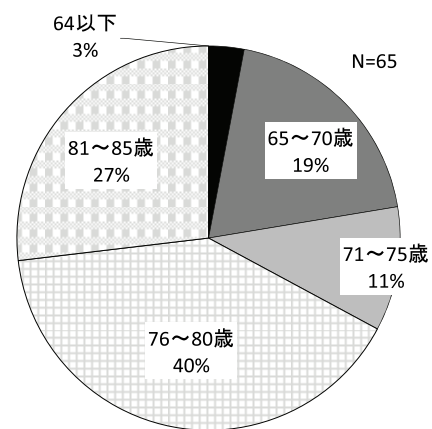


図 1 地域高齢者年齢

2) 学生満足度

学生の満足度の割合をみると、『交流会に参加して良かったか』と言う問いに対しては、「大変そう思う」73%と「まあまあそう思う」が27%と満足度が高かった。また『参加して自分のためになったと思うか』の問いには「大変そう思う」50%と「まあまあそう思う」が48%と高い満足度が伺えた (図2-A)。満足度の低い項目は『コミュニケーションがうまく取れましたか』において、「大変そう思う」が7%「まあまあそう思う」55%で「あまり思わない」「全く思わない」ものが合わせて39%見られ満足度が低かった。また『人の役に立ったと思うか』の項目も「大変そう思う」と「まあまあそう思う」あわせて64%にとどまった。

自由記述を見ると、学生は「その地域の人にしかわからない話が聴ける」「一緒に学ぶことが出来たので役に立った」「沢山のひとと交流してみたいと思うようになった」「普段はあまり交流できないから」という地域の方との交流の機会となっていた。また多くの学生はコミュニケーションに対して「何を話していいか不安だったが、思っていたよりも取れた」「レクリエーションなどを通していろいろな話が出来た」「自分から話題を作ってコミュニケー

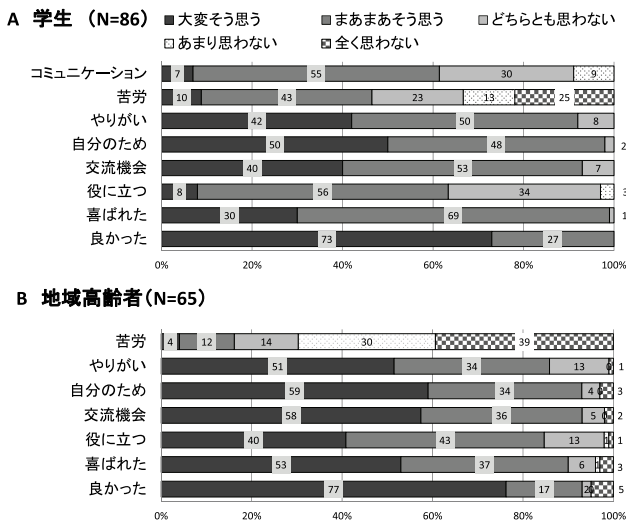


図2-2 交流会に参加した満足度の比較

ションが取れた」というように、共通の作業や遊びを通して会話が増え、回数が少ないながら「前回よりは自分から話題を出していけるようになった」というように世代の違う高齢者との関係づくりを行うことができた。

3) 地域高齢者満足度

地域高齢者の満足度を見ると、『交流会に参加して良かったか』と言う問いに対しては、「大変そう思う」77%と「まあまあそう思う」17%と満足度が高かった(図2-B)。ついで満足度の高かったものは『参加して自分のためになったと思うか』であり、「大変そう思う」59%と「まあまあそう思う」34%を合わせ94%の高い満足度が伺えた。『人の役に立ったか』では、「大変そう思う」40%と「まあまあそう思う」43%を合わせ83%の高い満足度の一方で、学生は低い値を示したが地域高齢者は役に立ったと感じていることが異なっていた。

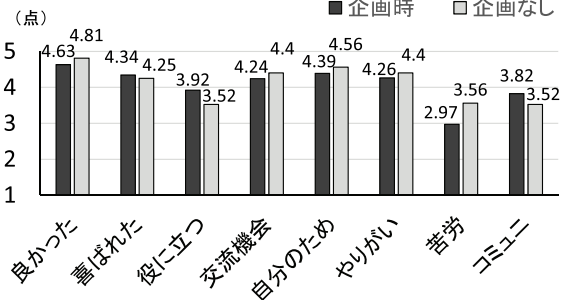
地域高齢者の自由記述として、「学生の皆さんの将来に役立つとしたら長く続けたい」「若返って元気をもらった」「大勢の人々と話をして気持ちが前向きになった」「現在夫婦2人だけの生活で、学生が孫のような存在」「若者の考えとか、あまり会話がなかったのでその時間が欲しい」といった、社交の場の提供となり、異なった世代間の交流の場となっていることがうかがえた。また、「多数の来客との交流、食品、食材の即売等学生も一定の体験ができたと思う」「講演会の時棒読みでなく、相手に説明する言い方の方よい」「新見を第2の故郷としてしっかり学んでほしい」という指導的な立場で、学生を育てようとしていることが伺えた。「役に立つ」という項目では、学生は自分の役に立つという意見が多かったが、地域高齢者では健康に関する情報の提供により「健康に関する講習会があったため非常に良かった」等の自由記述も見られた。

4) 企画満足度

交流会に参加する際、学生と地域高齢者が企画される側、企画を行う側の両方を体験したが自分たちの企画のありとなしによって、満足度に差が出ると予測した。そのためそれぞれ、企画のありとなしで満足度の平均得点の比較を行った(図3)。学生自身が企画を行う側になった際の学生の満足度を見てみると企画なしに比較して得点が高かったものは、「喜ばれた」4.34点、「役に立つ」3.92点、「コミュニケーションがとれた」3.82点の項目であった。また企画を行うことで苦勞が高くなると予想したが、実際は「苦勞」が2.97点と低い値となっていた(図3-A)。

地域高齢者の企画のありとなしの満足度の比較を行うと、「自分のためになった」が4.53点と企画なしより高い値となり、自分で企画を進めることは、世話をするという面だけでなく自分のためでもあるという認識が伺えた(図3-B)。

A 学生



B 地域高齢者

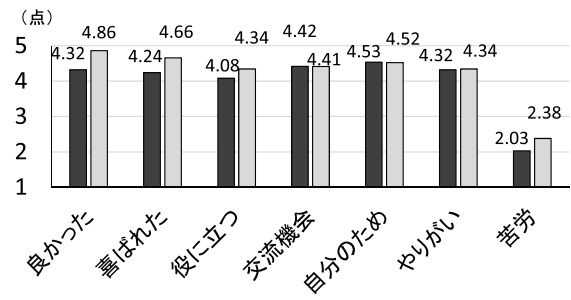


図3 学生企画ありなし満足度点比較

3. 考察

初年次教育に、学生と地域の交流会を組み込む背景として、市内高尾地区の地域福祉計画策定の座談会の中で、地区民の中から「高齢者や地区の活性化のために地元にある、大学・短期大学と共同して何かをしたい」という要望が挙げられた。これらを受け地元団体と介護福祉士の養成学科である新見短期大学地域福祉学科が、継続的な地域活性化のための活動として協同で平成23年10月より検討を重ねた。翌平成24年1月には、試行的に地区民と学生の交流会を開催し、4月に「高尾学区新見公立短期大

学学生との交流を考える会」を発足し、活動を開始した。継続的であり一部の学生にとどまらない参加を促すためにも、授業科目「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」の中に交流会を組み込んだ。この交流活動の基盤に平成20～22年にかけて実施した本学教育GP活動の「地域住民と学生による相互支援活動」があった³⁾。住民が教える側や教えられる側になり互いに影響し合う関係である相互支援活動の効果として、吉村らは「地域住民と関りから知ることの喜びや楽しさを感じることができ、住民の方々が喜んでくださることを実感することで、対象理解やコミュニケーション力の向上につながる」と述べている³⁾。

今回の調査結果からも学生・地域高齢者ともに交流に対して「よかった」という点で満足度が高く、学生・地域高齢者ともに「自分のためになった」と交流機会を高く評価している。また「やりがい」「喜ばれた」という得点も高く、特に相手に喜んでもらえたという感覚は、介護を学ぶ学生にとっても、地域の高齢者にとっても「援助行動」として認識される。妹尾は⁴⁾、援助行動の成果を「向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬」と定義し、その具体的内容は援助者が援助行動後に得る満足感や喜びといった肯定的感情や自己価値観といった好ましい認識と述べている。またボランティアにおける援助行動の効果についても「他愛性的精神の高揚」「人間関係の広がり」「人生への意欲喚起」への効果があると述べている⁵⁾。このように学生、地域高齢者にとって交流機会を持ち、互いに学び合う場の開設は、学習への意欲向上や自信へつながるものとなった。このように、初年次教育の中に地域交流事業を取り入れることは、相互により影響を及ぼしているといえる。

新入生が入学を肯定的にとらえる要素に学内で良好な人間関係を構築すること、学ぶ喜びを感じたことや、自分が人間的成長できたと思えたときに満足度を高めることができるという報告がある⁶⁾。本学の基礎ゼミナールは、グループワークを通じての学生同士の交流や関係づくりや、共同での企画作業、実践発表を行い、地域の高齢者に喜んでもらう姿をみて自己の満足感や自己肯定感を得ることで成長を感じてもらうことが学習の喜びにつながり、大学生活への円滑な移行につながると考えられる。

学生と地域高齢者で差が見られたのは、「役に立つ」の項目であり、地域高齢者の方が高い得点であるが、学生は低い得点となっていた。自由記述を見ると、「もっとこうすれば良かった」「教えてもらってばかりだった」「私の役割だと居てもいなくても変わらないような気がした」という記述がみられ、実際に学生一人に対しての実践機会が不足しているため、学生は満足感が低いと考えられる。また学生は「苦勞した」という項目において、一般高

齢者に比較して高かった。自由記述では、「準備も苦勞したし当日も説明をしたりするのが大変だった」や「何を話せばいいかわからなかった」「話しをする時のタイミングが難しかった」「耳が聞こえにくい人と話す時の声の音量」など、コミュニケーションの取り方や、企画の準備、説明の仕方といったことで苦勞したと感じていた。

学生の交流会実践場面はこの科目だけではまだまだ少なく、学生はできなかったという経験はできたもの、次にこうしたいという再チャレンジや修正の機会が少なく、成功体験へは至っていない。今後はもっとコミュニケーション力や、企画力、発表力といった実践力の強化が求められる。そのため実習や、学習、ボランティアなど多くの生活体験を重ねることが求められる。例えば、自分自身が何かを企画する際、手順や実践を通しての、何が不足していたか、分らないことはなにか、に気づき次への学習課題が見つけることができ、そのことが学習につながっていくことを期待する。

今回、交流事業で自分達や親世代と異なる高齢者といった世代が異なるものとの交流は、耳の聞こえにくい人への対応や、会話のきっかけの作り方や、共通の話題など基本的なコミュニケーション技術の不足に学生は気づくことができていた。現在の我が国の子供の現状を中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会の「学校から社会・職業への移行」をめぐる経緯と現状の中で子供・若者の変化をコミュニケーション能力の不足、対人関係能力、基本的マナー、自分で生産する活動や社会性等に未熟さがみられると指摘している⁷⁾。こういった事は、介護を学ぶ学生にも見られ、特に対人援助が求められる専門職である福祉において、これらの力を強化していくことは必須で今後も大きな課題となる。

文献

- 1) 文部科学省：「学校基本調査」18歳人口および高等教育機関への入学者・進学者等の推移, 2013
- 2) 厚生労働省：介護福祉士養成課程における教育内容の見直しについて, 2007.
www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigoyousei02.pdf, 2013. 9. 4 アクセス.
- 3) 吉村淳子, 松本百合美他：生活文化を視点にした介護福祉養成教育-地域住民と学生による相互支援活動を通して-平成20年度教育GP最終年度報告書, 新見公立短期大学, 2011.
- 4) 妹尾香織, 高木修：援助行動における援助者の心理的効果：研究の社会的背景と理論的枠組み - 社会心理学研究, 55, 181-194, 2001.
- 5) 妹尾香織, 高木修：援助行動経験が援助者自身に与える効果-地域で活動するボランティアに見られる援助効

果 - . 社会心理学研究, 18(2), 106-118, 2003.

- 6) 今村亨, 窪内節子: 効果的な初年次教育の導入に関する研究－山梨英和大学におけるアカデミックリテラシーの内容分析を中心に山梨英和大学紀要第10, 68-81 2011.
- 7) 文部科学省: 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(第二次審議経過報告)2010.

